一般国道10号

宇佐バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報III

横　山・尾　畑・峯　添
正布迫・柳沢・松ケ平遺跡

1990
大分県教育委員会

F－V－7区Ⅰ層出土土偶（原寸）
撮影　藤　田　晴　一氏

例　　言

1. 本書は、平成元年度に実施した一般国道10号宇佐バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要報告である。
2. 発掘調査は、建設省九州地方建設局大分工事事務所の委託事業として大分県教育委員会が実施した。
3. 調査組織は次のとおりである。

調査委員　賀川　光夫（大分県文化財審議会委員・別府大学教授）
小田富士雄（大分県文化財審議会委員・福岡大学教授）
潮見　　浩（広島大学教授）
水野　正好（奈良大学教授）
後藤　正二（大分県教育庁管理部文化課長）
後藤　宗俊（同　課長補佐）

調査主任　渋谷　忠章（同　埋蔵文化財第二係長）

調 査 員　高橋　徹（同　主査）、村上久和（同　主査）、西　哲弘（同　主任）、小林昭彦（同　主任）、友岡信彦（同　主事）、松本康弘（同　主事）、吉田寛（同　主事）、後藤晃一（同　主事）、永松みゆき（同　嘱託）、吉武牧子（同　嘱託）、今泉正子（同　嘱託）

4. 本書の執筆は、小林・後藤が分担し、編集は渋谷・小林が行った。

目　　次

Ⅰ　はじめに……（1）
(1)　調査の経過……（1）
(2)　平成元年度調査遺跡の概要……（1）
Ⅱ　発掘調査の概要……（3）
(1)　横山遺跡……（3）
(2)　尾畑遺跡……（7）
(3)　峯添遺跡……（17）
(4)　確認調査……（18）
Ⅲ　ま と め……（21）
Summary ……（22）

Ⅰ はじめに

(1) 調査の経過

北大バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、宇佐バイパスについては今年度で4年目を迎えた。調査は、予定の地区において本・試掘調査を開始したが、前年度から調査を継続して行った地区や工事の都合上早急な対応が要請された地区などがあり、当初の予定は若干変更した。

現地調査は、4月に尾畑遺跡(北地区)の継続調査から開始した。この遺跡では全面積約20,000㎡のうち今年度の調査範囲は約7,000㎡であった。調査は縄文時代遺物包含層を主に実施し、平成2年3月に終了した。

これと並行して横山遺跡の調査を9月から開始した。横山遺跡の範囲は、丘陵部とその下の水田部を含んでいた。調査は排土作業を考慮し水田部から着手し、10月に終了した。丘陵部の調査は尾畑遺跡に主体を向けたため12月に一時中断し、平成2年1月再開し同年3月に終了した。峯添遺跡では平成2年3月に本調査を実施し、未調査部分については来年度調査予定となった。試掘調査は5月～8月に柳沢遺跡、正布迫遺跡を対象に行った。

このほか構造物建設に伴う小範囲の調査を8月、10月に実施した。これはバイパスと交差する既存の道路に架かる橋梁あるいはボックス部分を対象とした調査であった。今回は松ケ平遺跡の範囲内に二か所の該当地があった。

(2) 平成元年度調査の概要

本調査は、横山遺跡、尾畑遺跡、峯添遺跡について実施した。確認調査は、柳沢遺跡、正布迫遺跡、松ケ平遺跡で行った。

横山遺跡（No.2）では丘陵上に弥生時代中期を中心とする住居跡、土坑群や溝などを検出した。丘陵東側の低地では、近世の井戸や火葬墓、ピット群を確認した。

尾畑遺跡（No.3）は北地区の調査を継続して行った。今年度は遺跡の範囲がさらに北へ広がることを確認したため調査の対象範囲は拡大した。確認した遺構は縄文後期後半～晩期の遺物包含層、奈良時代の溝、土坑、ピットであった。特に遺物包含層の調査では土偶や玉類が多く出土し注目された。

峯添遺跡（No.4）は今年度一部の範囲について本調査を実施したにとどまり、大半は来年度の調査予定である。

確認調査を実施した遺跡については、柳沢遺跡において、竪穴、火葬墓などを確認した。松ケ平遺跡では、旧地形が残っており遺構の存在が考えられた。しかし、今回の試掘調査では遺構の確認はなかった。両遺跡ともに来年度の調査予定である。

1 笠松遺跡 2 横山遺跡 3. 尾畑遺跡 4. 桐ケ迫遺跡
5 峯添遺跡 6 正布迫遺跡 7. 棚沢遺跡 8. 松ケ平遺跡
9 向山遺跡 10 下山遺跡 11. 浄円寺遺跡

● 本調査実施
▲ 試掘調査実施
◐ 前年度一部調査
○ 未調査

(本図は国土地理院「宇佐」(2万5千分の1)地形図を使用した)

第1図 宇佐バイパス路線内遺跡分布図

II　発掘調査の概要

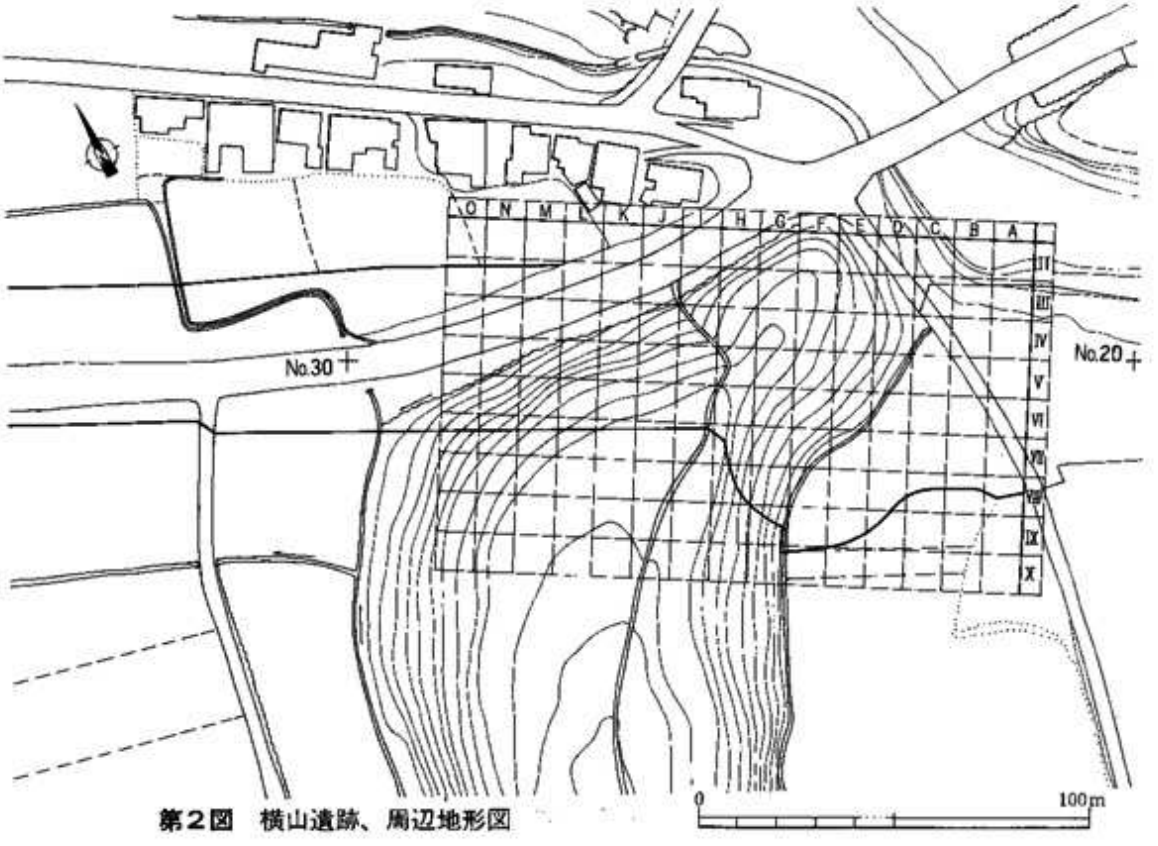
(1)　横山遺跡（No. 2）

調査は、伊呂波川左岸に位置する標高約30mの低丘陵とその東側の低地を合わせた6,400 m²の範囲を対象とした。遺跡の立地する丘陵部は西方向へ伸びた舌状台地となっている。この丘陵は東側の糸口丘陵と連続していたものと思われるが、現在は伊呂波川に開析され独立丘陵となっている。

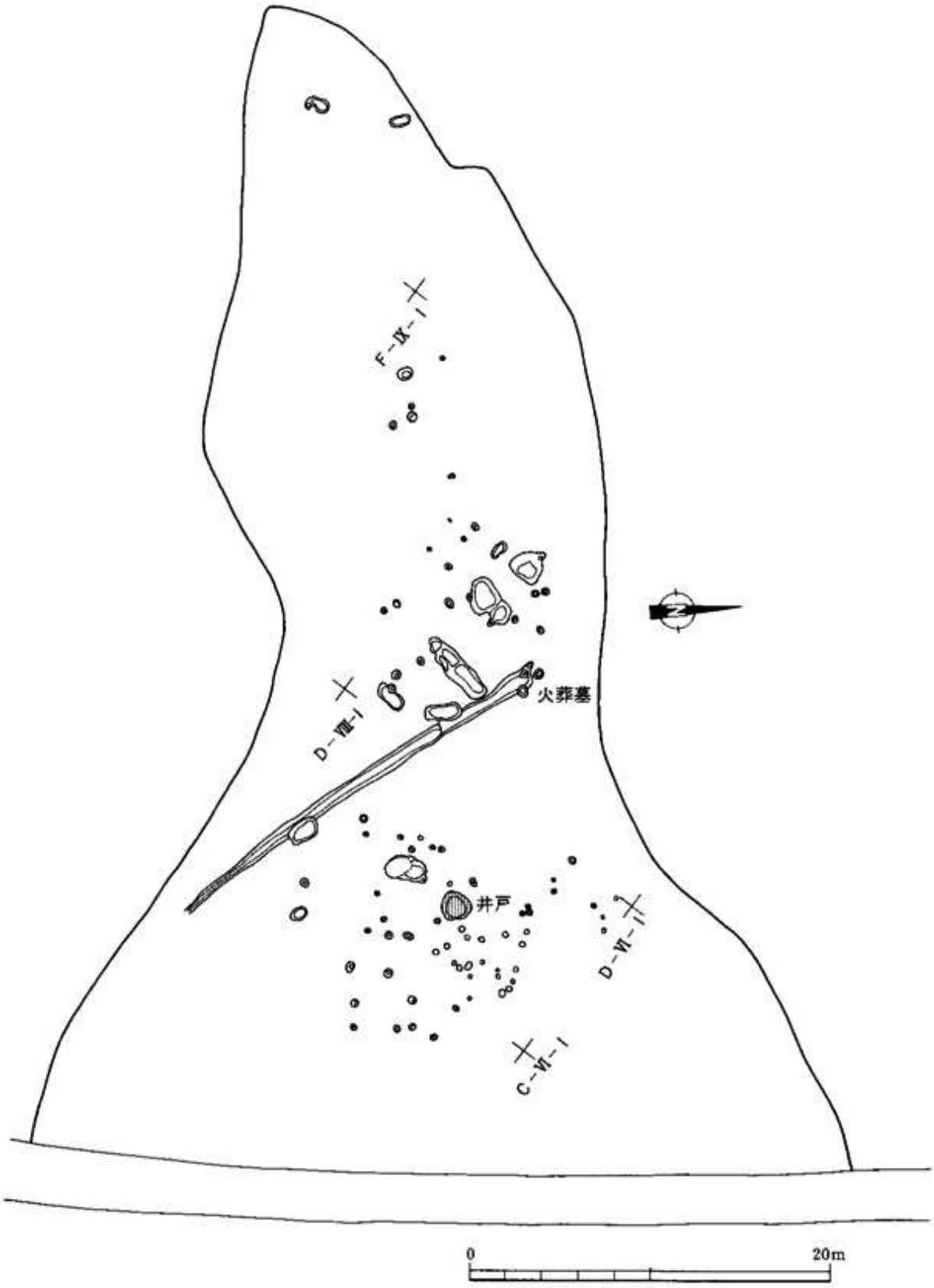
遺構は、弥生時代中期初頭頃の竪穴、貯蔵穴、ピットや、溝などであった。遺構の分布は丘陵の上部平坦面およびその周辺に集中するものであった。

竪穴は2基検出され、一辺が3～4mの不整方形を呈していた。貯蔵穴は竪穴に伴う位置関係にあった。形態は袋状をなし、内部から土器、礫が出土した。溝は丘陵の稜線に沿って伸び、弥生の住居跡を切断していた。隣接する溝から14世紀後半の瓦器が出土しており近似する時期が考えられる。西接する範囲については宇佐市教育委員会が調査を実施した。この結果、弥生時代前期末～中期初頭頃の竪穴住居跡、貯蔵穴と、中期後半～末の環境状の溝、竪穴住居跡などが検出されている。

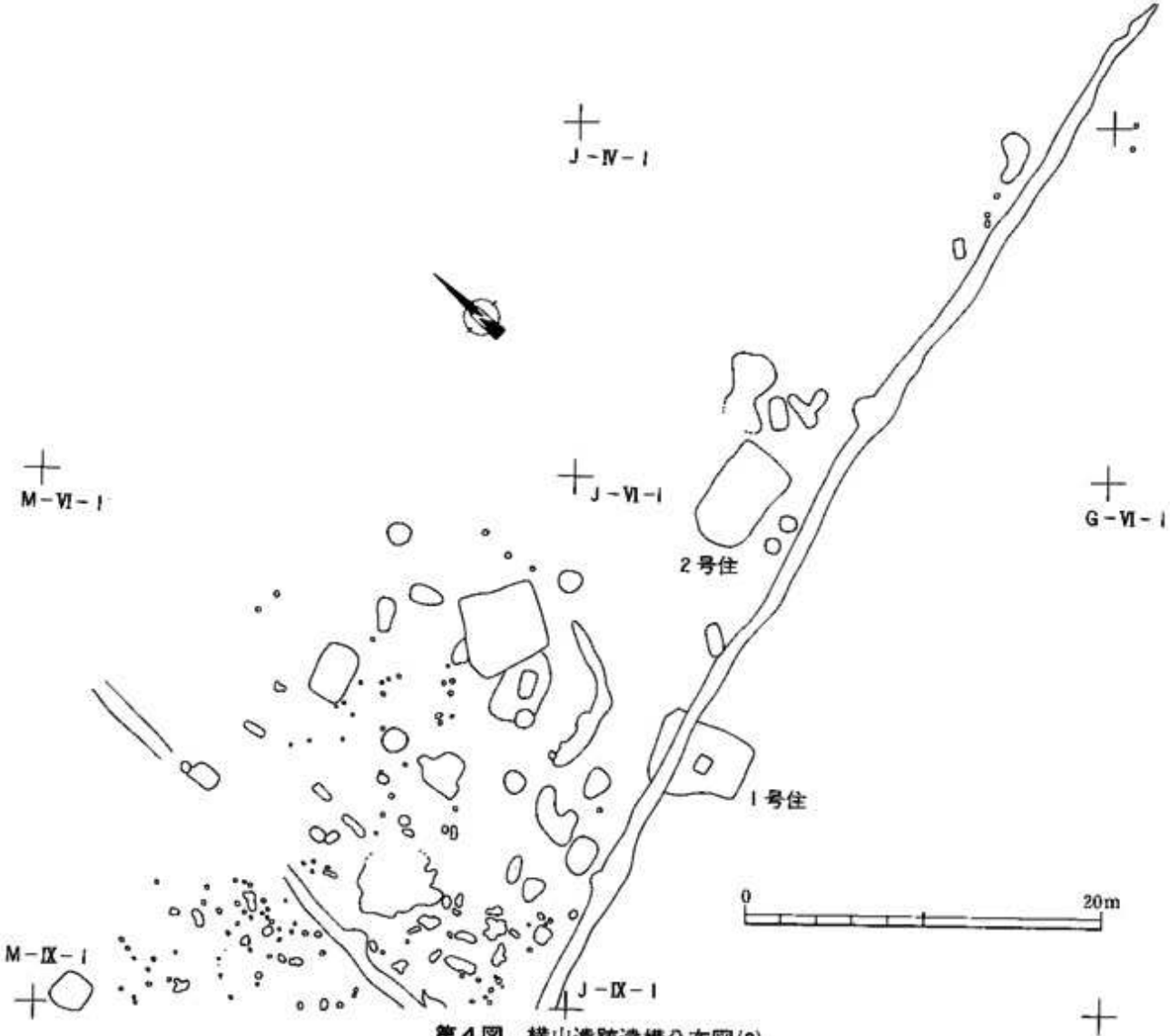
丘陵東側の低地は削平を受けており、表土の下は基盤の礫砂層となっていた。遺構は弥生時代中期初頭頃の土坑、近世の火葬墓、井戸、溝、ピットであった。



第2図　横山遺跡、周辺地形図



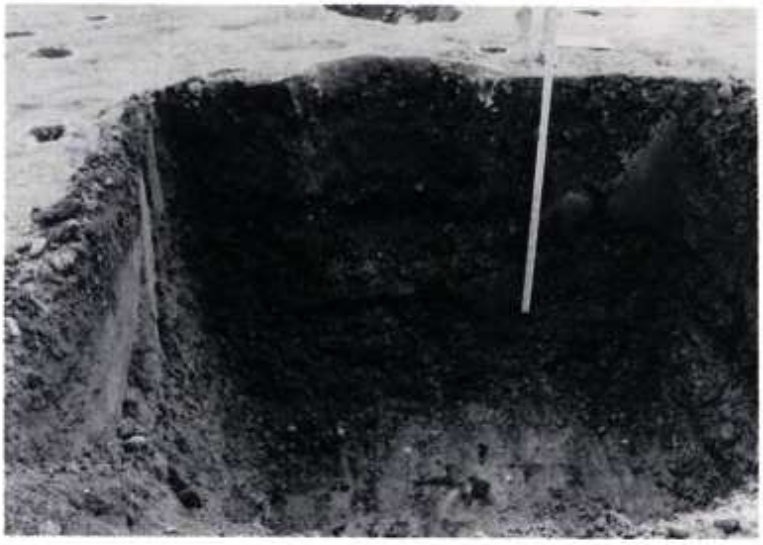
第３図　横山遺跡遺構分布図(1)



第4図　横山遺跡遺構分布図(2)

横山遺跡水田部全景
（北西方向から）

井戸の断面
（東方向から）



丘陵部１号住居跡
（東方向から）

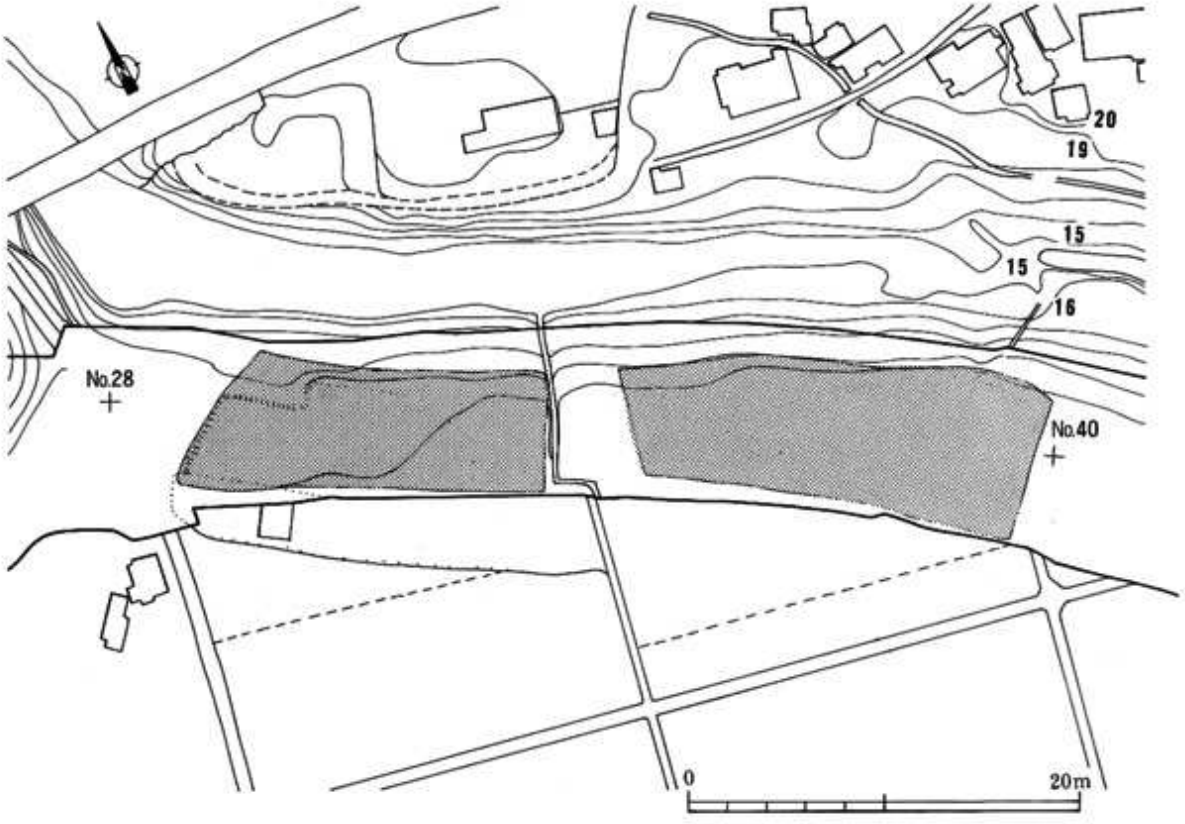
(2) 尾畑遺跡（No.3）北地区

遺跡の範囲は北II区の6,000㎡であった。この範囲は昨年から継続して調査を行ったA～I区地区と今年度北西に拡張したK～S区を含む。またI～K区の約25mの間は、従来家屋と排水路があったため撹乱を受けていた。

調査はこの範囲全域について行った。その結果、A～I区では縄文後期～晩期の遺物包含層、溝4、土坑11、ピット20などをK～S区では弥生時代中期の土坑10、溝6、ピット30を検出した。

A～I区　縄文後期～晩期の遺物包含層の調査と並行して8世紀の溝や土坑などの検出作業を行った。

遺物包含層は調査区の北東を流れる伊呂波川に沿って広がっていた。その範囲はA区からI区付近までの約90m、東西方向には最も広いところで約20mの幅であった。包含層は地区によって堆積の厚さに差があった。このうち調査区のほぼ中央に位置するE～G－IV、V区は緩い窪地となっており、包含層の範囲の中で最も厚い堆積を観察することができた。層序は4～5層に区分でき、最上層のI層は20～60cmの黒茶褐色土層であった。この層中から縄文後期後半～晩期前半の土器、石器類が多量に出土した。また土偶、円盤状土製品、玉類なども多く出土している。



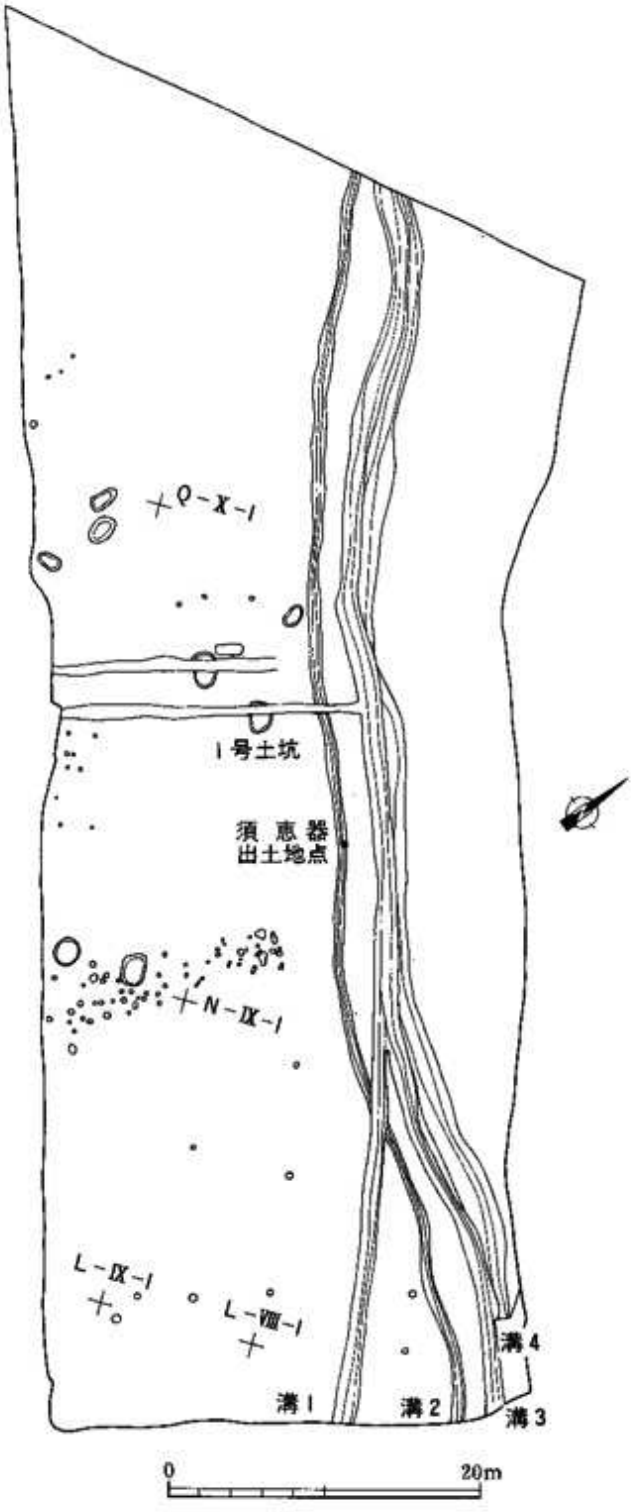
第5図　尾畑遺跡、周辺地形図

溝は河川段丘の縁辺部に位置しており、4条を確認した。溝は包含層を掘り込んで作られていた。溝の規模は確認時で、上面幅0.6～2.0m、底面幅0.2～0.6m、深さが1.0～2.0mであった。断面形は下の方が狭い台形あるいはY字状であった。溝の流れは河川と同じ北西方向であったが、溝底面の傾斜からみてかなり緩やかであったと思われる。溝は4条が近接して設けられており、溝Iは溝4を切って掘られていた。4号溝から8世紀中葉の須恵器が出土しており、このころに溝が機能していたものであろう。

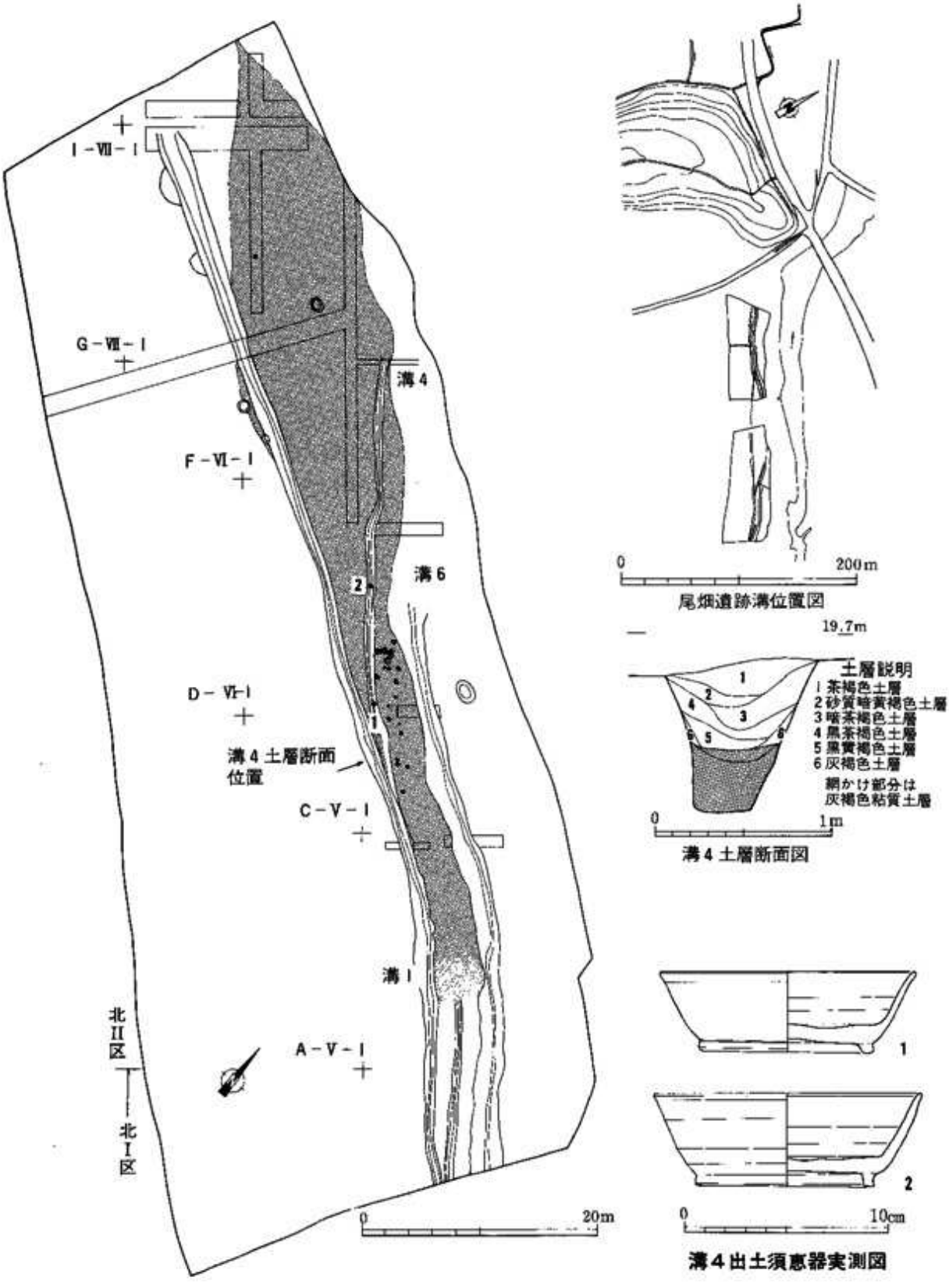
K～S区　検出した遺構のうち土坑は10基ある。土坑の時期は出土遺物に刻み目突帯をもつ甕などがあり弥生時代中期初頭に比定できる。この地区でも溝を6条確認した。溝1は明らかにA～I区から伸びてきたものである。溝2・3・4はK区東で確認されていたため、その東端は河川の方へ伸びていると思われる。また溝は相互に重複しており、その新旧関係は溝2→1→3、溝4→3の順序で新しくなる。

溝内の出土遺物として、溝2の須恵器、溝4の凸面縄目、凹面布目をもつ女瓦がある。

溝2出土須恵器実測図



第6図　尾畑遺跡北II区遺構分布図(1)



第7図　尾畑遺跡北地区遺構分布図(2)

出土遺物（包含層Ⅰ層）

ここから出土した遺物には、縄文時代後期後半～晩期前半の土器、土製品、土偶、玉類、石器などがある。ここでは土器を中心に説明していく。土器の時期は13、14が後期後半、そのほかは晩期前半である。

浅　鉢（1～14）

1、口縁部は胴部最大径を凌ぎ、長く外反する頸部をもつ。胴部は屈曲する。

2、口縁部はほぼ直立し、凹線を一条施す。

3、口縁部はほぼ直立し、頸部は強く外反する。胴部は屈曲する。

4、口縁部は四か所で山形に隆起し、ほぼ直立する。頸部は緩く外反する。波頂部では口縁部と肩部に凹点を二つ施す。

5、口縁部はわずかに外へ開き、山形に隆起する。胴部は直線的に底部へ続く。波頂部では口縁部と肩部に凹点を二つ施す。

6、口縁部は四か所で山形に隆起し、僅かに外へ開く。頸部は緩く外反、胴部で屈曲する。波頂部では口縁部と肩部に凹点を二つ施す。

7、口縁部は僅かに外へ開き、四か所で山形に隆起する。頸部は強くしまり胴部は屈曲する。

8、口縁部は外へ開き、端部が内側に肥厚する。頸部はしまり、胴部は屈曲する。

9、口縁部は外へ開き、端部が内側に肥厚し断面三角形を呈す。

10、口縁部は外へ開き、沈線を三条施す。口縁端部は内側に肥厚する。

11、口縁部は外へ開き、四か所で山形に隆起する。口縁端部は放射状に肥厚する。また口縁部に沈線を四条、肩部に刻み目を施す。

12、口縁部の破片、波頂部の一部と考えられる。沈線は横方向に二条巡り、さらに波頂部から二条垂下する。

13、口縁部の破片、内側に沈線を二条施す。

14、口縁部は胴部最大径を凌ぎ頸部は緩く外反。頸部に凹線二条、肩部に四か所凹点を施す。

深　鉢（15～23）

15、口縁部は外へ開き、四か所で山形に隆起する。頸部は緩く外反し、胴部は屈曲する。口縁部は凹線状にくぼむ。

16、口縁部は外へ開き、端部が内側に肥厚する。外面には二枚目による条痕が残る。

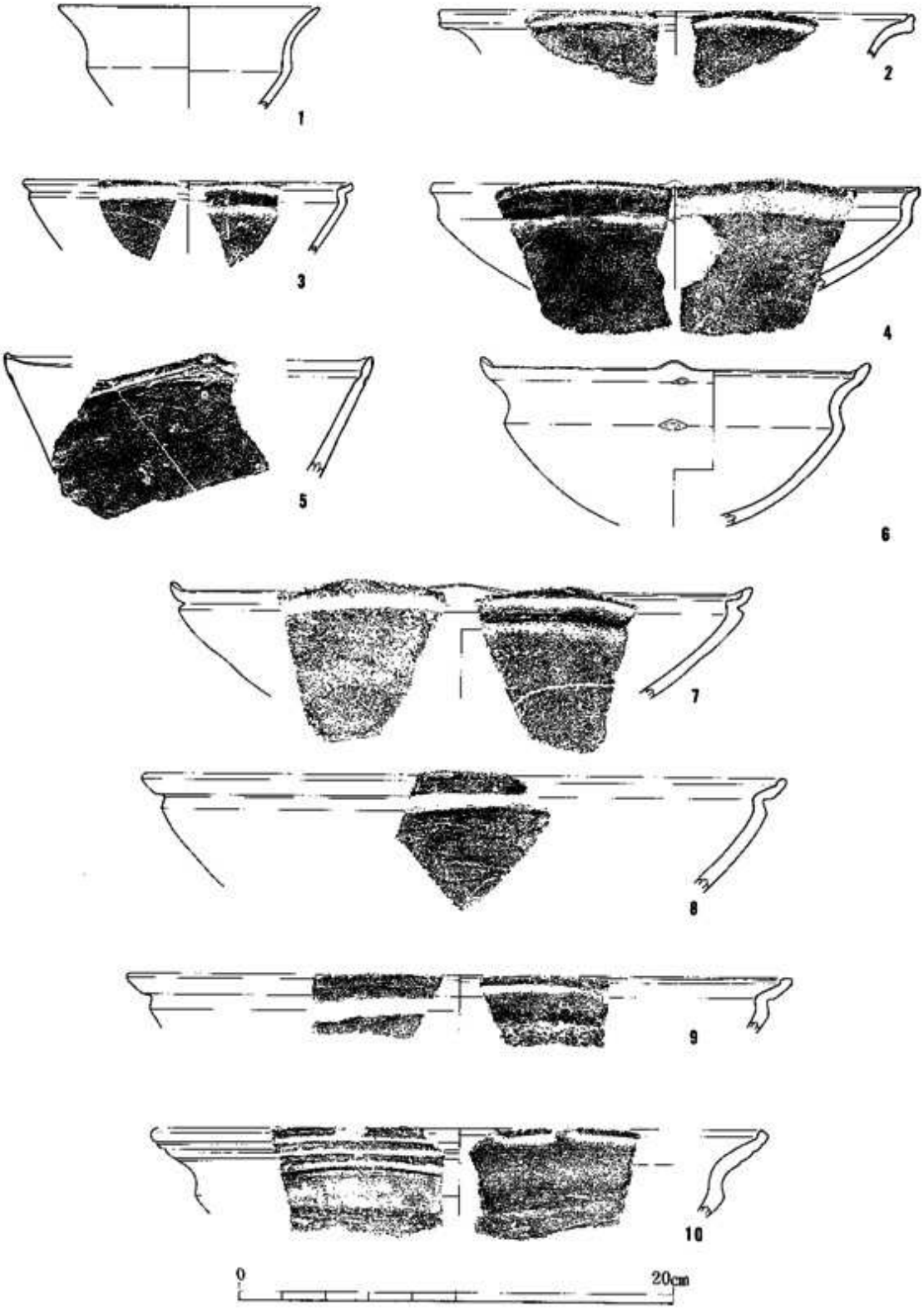
17、口縁部は内湾気味に立上がる。外面には横方向の巻き貝条痕が残る。

18、口縁部はほぼ直立する。外面には横方向の巻き貝の条痕が残る。

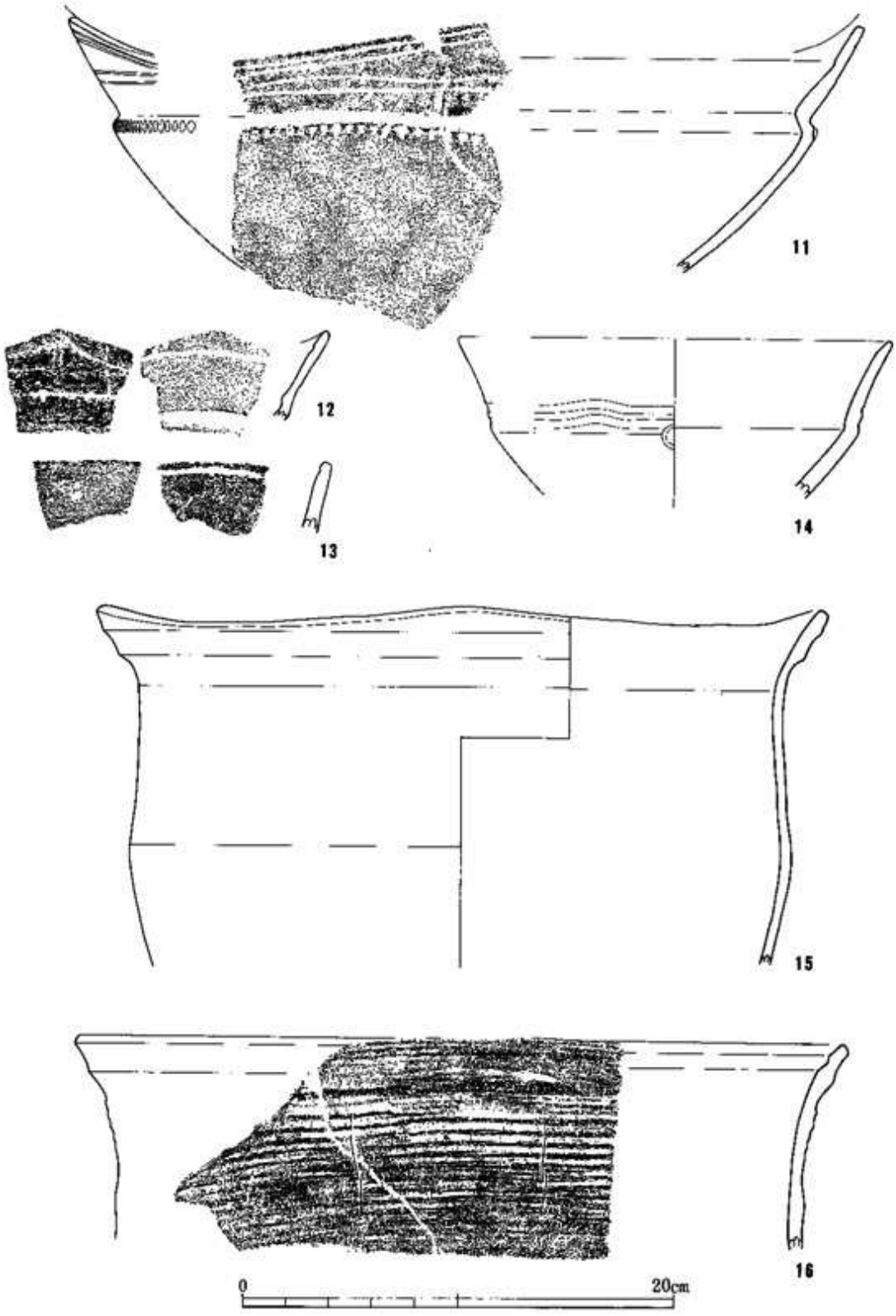
19、頸部は緩く外反し口縁部にいたる。外面には横方向に二枚貝の条痕が残る。

20、頸部は強く外反し口縁部にいたる。外面には貝殻の条痕が残る。

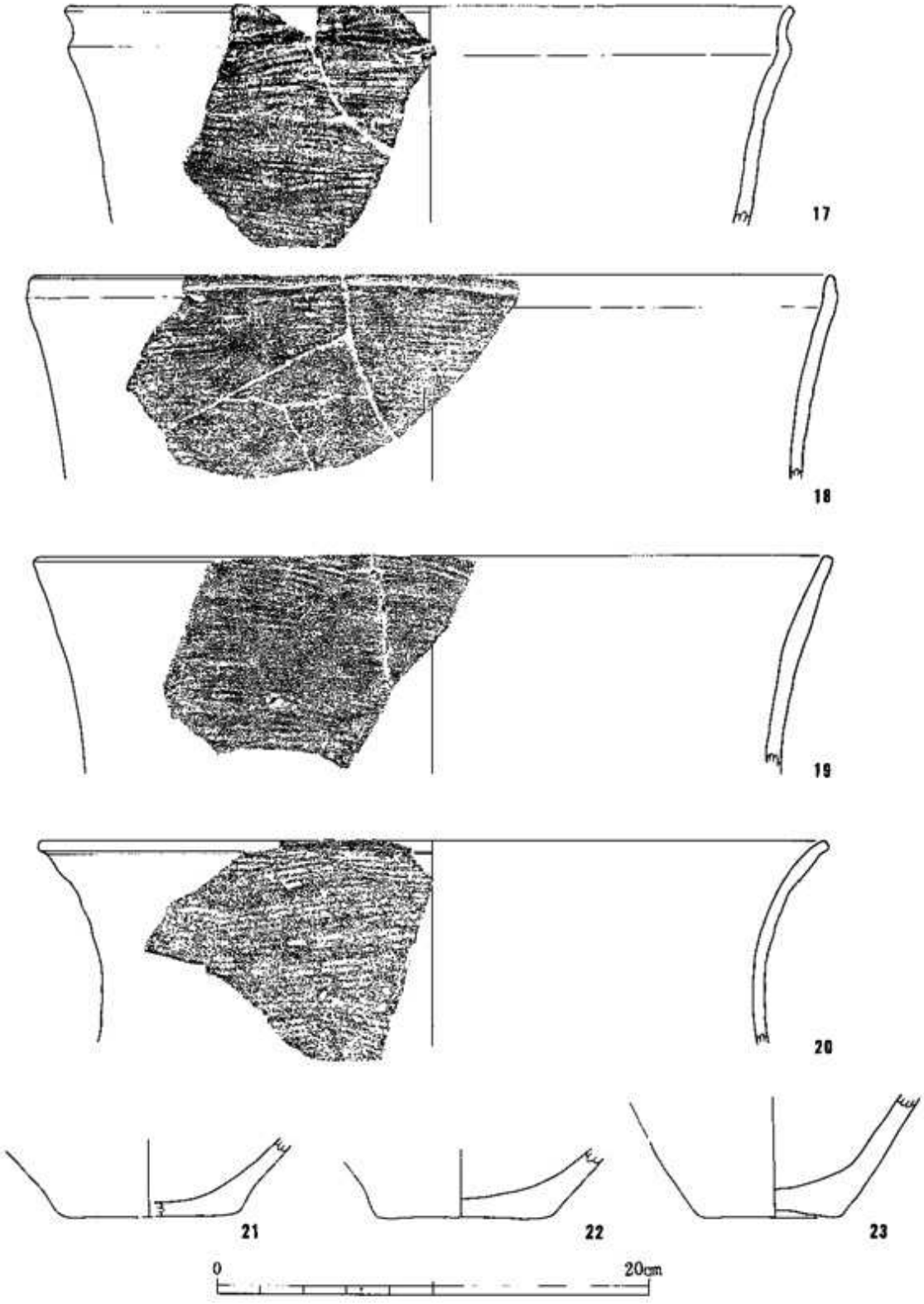
21・22は平底であり、21の外面には巻き貝の条痕が残る。23は上げ底である。



第８図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土遺物実測図(1)



第９図　尾畑遺跡、北Ⅱ区出土遺物実測図(2)



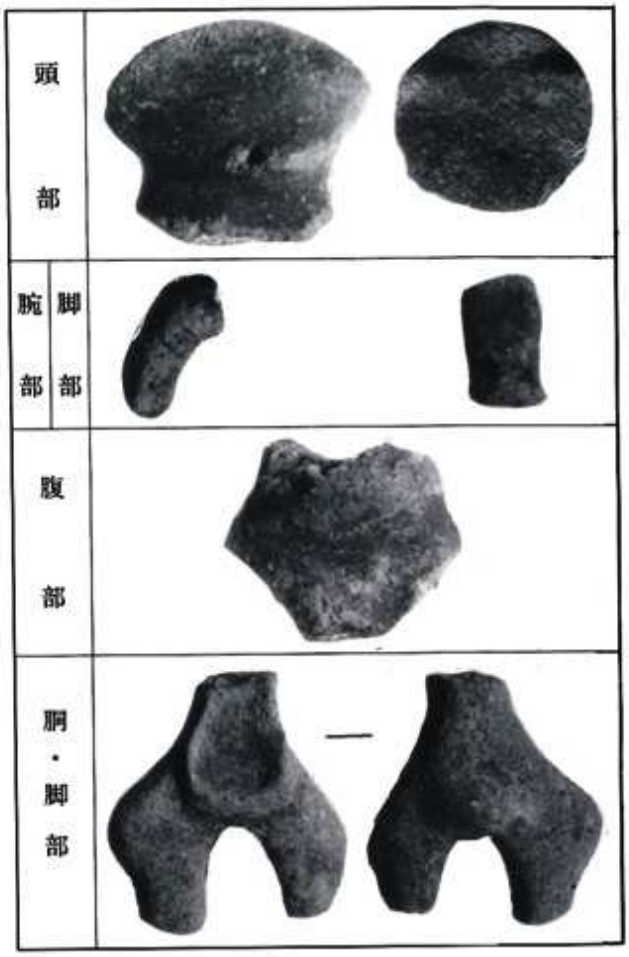
第10図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土遺物実測図(3)

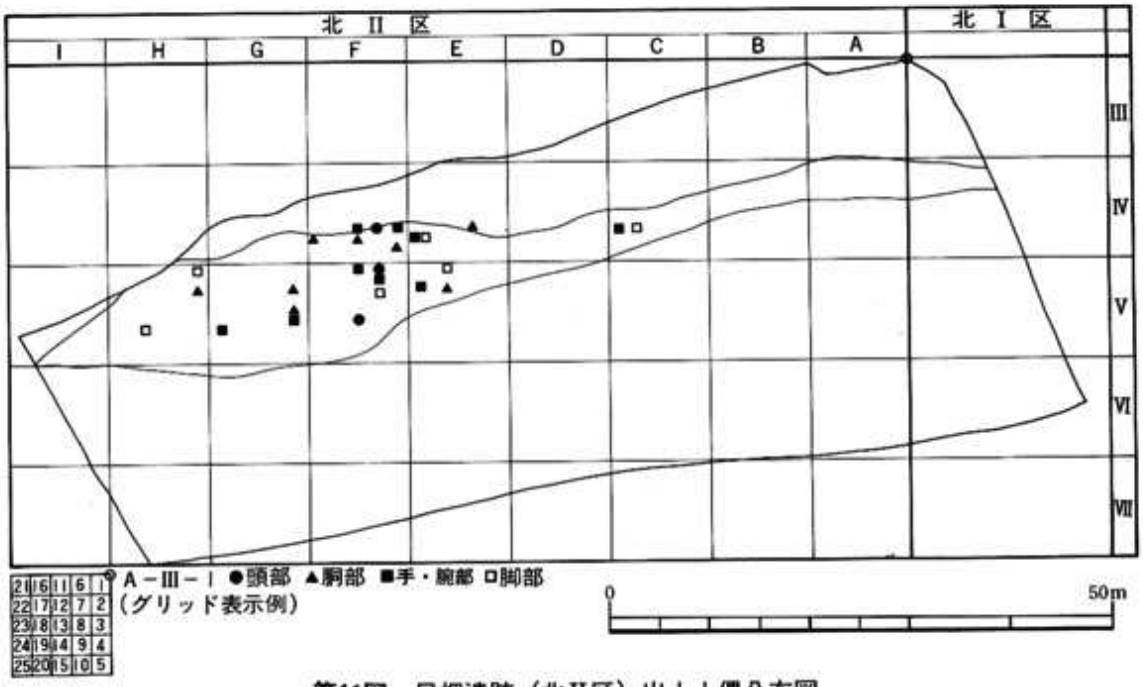
土　偶

遺物包含層から出土した土偶29点である。出土地点はC～H－Ⅳ・Ⅴ区におよぶが、最も集中する範囲は堆積の厚いE・F－区であり、全体の65%にあたる。

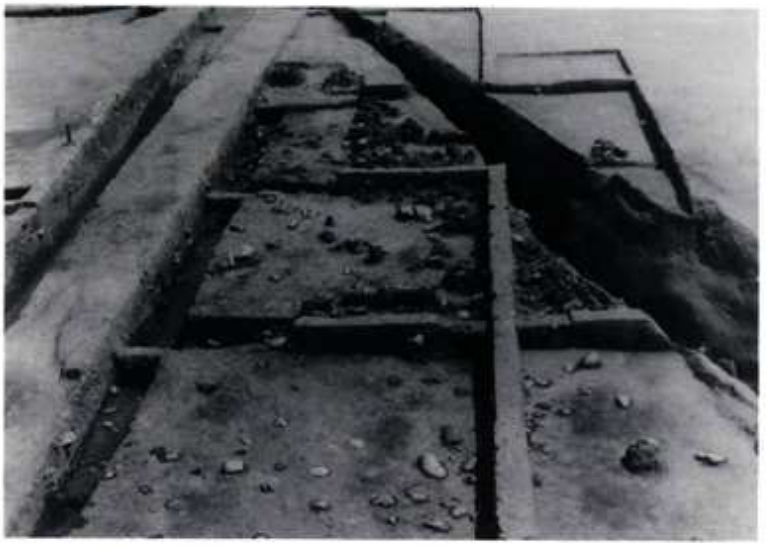
土偶が出土した層位は26点中24点がⅠ層、1点はⅡ層からであった。さらに1点は溝6の覆土に混入していた。

土偶はいずれも体の一部であり、頭部、胴部、腕部、脚部、あるいは腕と胴、胴と脚が残った状態で検出された。しかし、なかには胴部、片腕、片脚が残る例がある。このうちの一点は胸部や腹部の表現から妊婦であることを顕著に、しかもリアルに示したものである。（巻頭写真）。

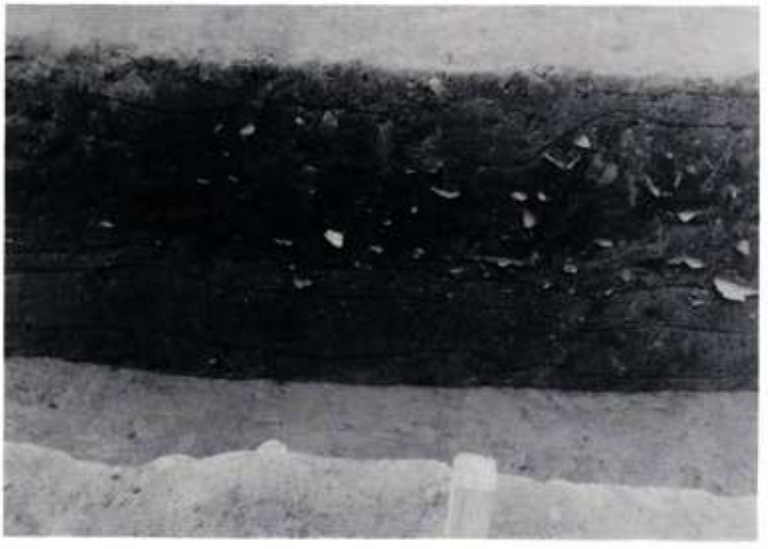




第11図　尾畑遺跡（北Ⅱ区）出土土偶分布図



F－Ⅴ区遺物出土状態
（北方向から）



F－Ⅴ区遺物包含層
（東方向から）

浅鉢出土状態
（東方向から）

F－V－7 区土偶出土状態
（北方向から）

K～S区　全　景
（北方向から）

O区１号土坑
（西方向から）

(3) 峯添遺跡（No. 4）

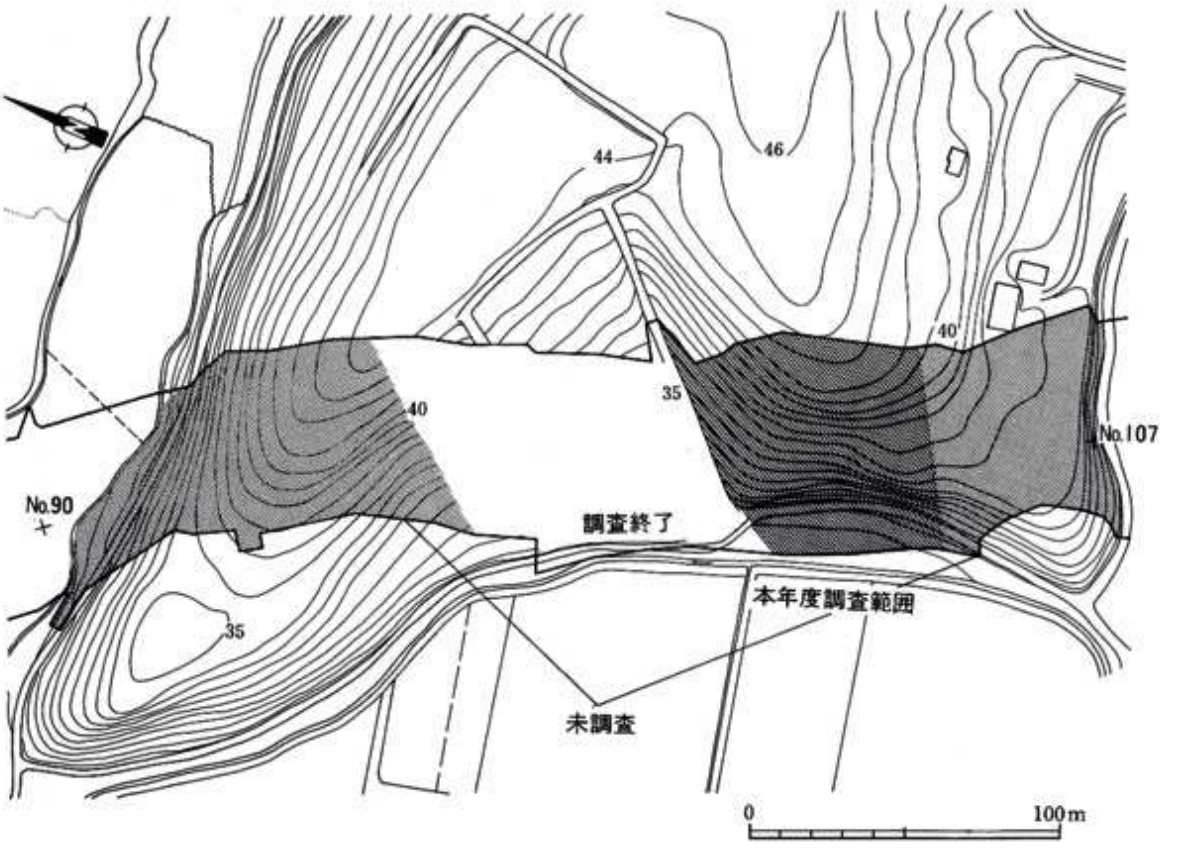
峯添遺跡は四日市台地西南部の縁辺に位置している。この周辺は、北流する伊呂波川を挟んで左右に平野部が広がっている。伊呂波川は上流で西の丘陵裾部に近接するため平野部は東に広がる。この平野を臨む東部の丘陵に四日市台地がある。桐ケ迫遺跡から正布迫遺跡までの調査の対象地はこの台地の西南向き斜面が中心となっている。その範囲は地点によって異なるが、丘陵裾部から上半部におよぶ。

峯添遺跡では西へ舌状にのびる斜面の上部から中腹を調査対象地とした。

調査した遺構は弥生時代の土坑、不整形の落ち込みなどであった。この他に近世墓地が残っている。今回の調査は、予定していたほかの遺跡の調査が長期化したため南部範囲が未了となった。

峯添遺跡遠景（北西方向から）

近世墓地（北方向から）



第12図　峯添遺跡周辺地形図

(4) 確認調査

この調査は、遺構の存否およびその広がりの確認を目的とする。今回実施した地点は、正布迫、柳沢、松ケ迫遺跡の3地点であった。

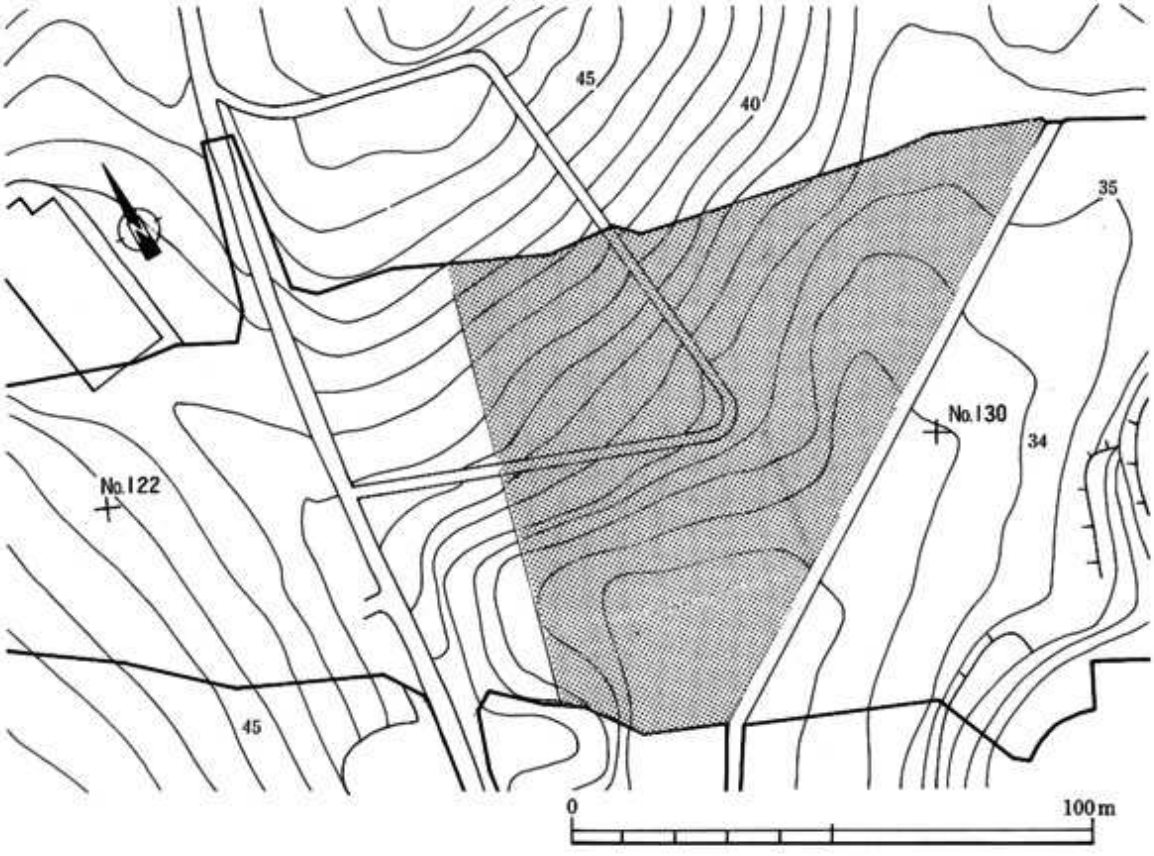
a，正布迫遺跡

調査はこの遺跡の東端部3,300㎡について行った。周辺の地形は東西を丘陵で挟まれ、この間に南へ開口する谷が形成されていた。

調査対象地は西側の斜面と谷部にあたり、遺構の存在が想定された。しかし、当該範囲の削平は予想以上に深く、0.5～1mの表土層を除去したところ基盤層が露呈し堆積土はまったく見られなかった。したがって遺構の存在も確認されなかった。このような状況は、昨年度調査を行った隣接地と同様であり、果樹園造成に伴う旧地形の改変が顕著であることを示している。

正布迫遺跡東端部（北西方向から）

トレンチ調査（東方向から）



第13図　正布迫遺跡周辺地形図

b，柳沢遺跡

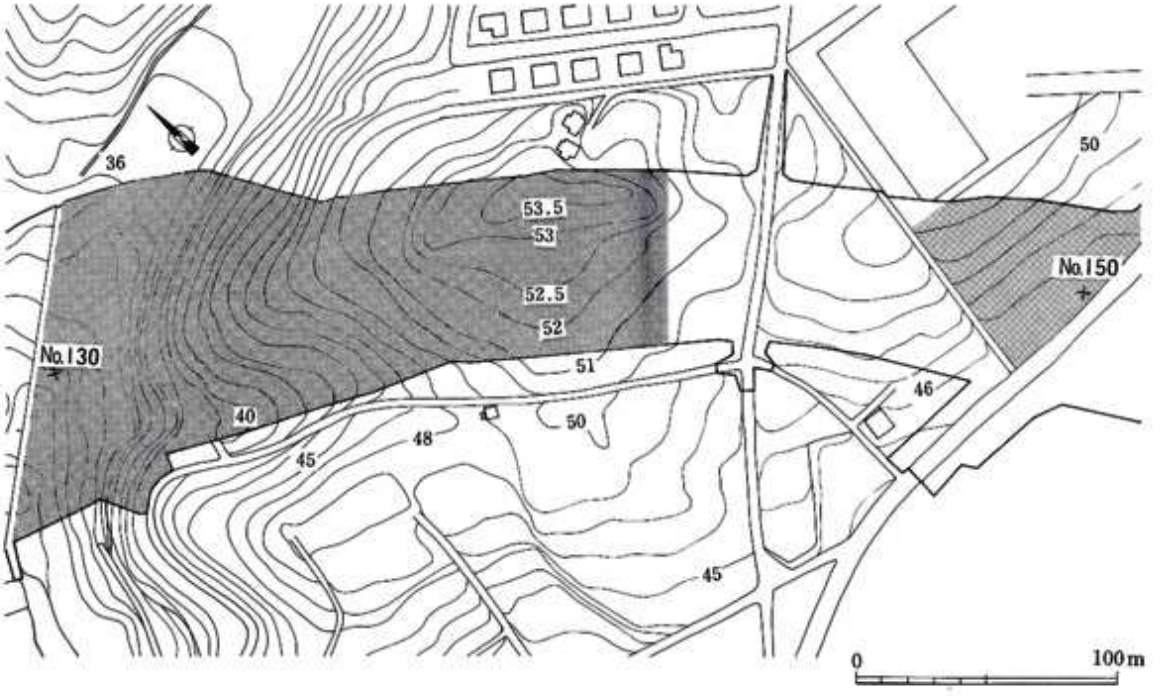
遺跡の範囲は、正布迫遺跡の東側に位置する谷、丘陵の21,000㎡と、調査範囲の東端部にあたる東向き斜面の2,800㎡の合わせて23,800㎡であった。調査は、この範囲全域について表土を除去し、遺構の確認を行ったものである。

調査の結果、谷部と丘陵部の南西1／3には遺構は見られなかったが、丘陵の平坦面に竪穴、土坑、ピット、溝などが分布していた。このうち竪穴は方形の平面形を呈し、一辺が3m未満の小規模なものである。現段階で4基ほど確認している。土坑には火葬墓と思われる例がある。これは長方形の平面形を持ち壁面が焼けている。

柳沢遺跡（南方向から）

東部の範囲の調査は、橋梁工事にともなう事前調査として実施したものである。遺構は確認されなかった。また、この遺跡の丘陵部については来年度本調査を予定している。

柳沢遺跡東端部（西方向から）



第14図　柳沢遺跡周辺地形図

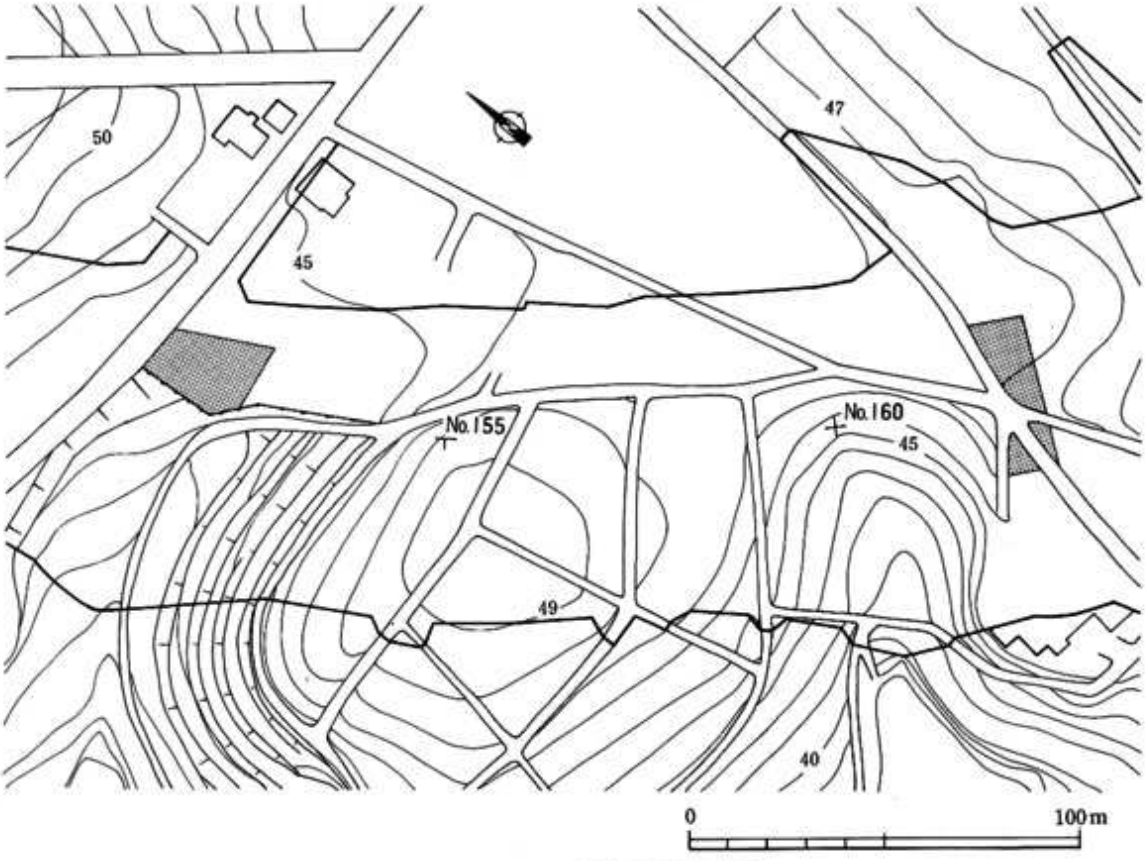
c，松ケ平遺跡

今男の調査は橋脚、バイパスと交差する利道のボックス工事にともない小範囲について遺構の存否確認を実施したものである。該当地は2箇所あった。ひとつは柳沢遺跡から伸びる橋の脚部範囲460㎡の調査であった。この範囲は松ケ迫遺跡の西端部分にあたり、地形的には谷に該当する部分が大半であった。重機を導入して試掘を行ったが、遺構を確認することはできなかった。

松ケ平遺跡橋脚部（北方向から）

もう一か所は利道のボックス範囲の調査であった。ここは、松ケ迫遺跡のほぼ中央部の緩い西向き斜面に位置していた。調査は工事範囲の300㎡について実施した。その結果、表土中から弥生土器の細片を採取したが遺構を確認することはできなかった。しかし土層の観察から、旧地形が良好に保たれていることが想定できる。しかも遺跡の範囲は、大半が丘陵の平坦面にかかっており遺構の存在が考えられる。

ボックス範囲（北方向から）



第15図　松ケ平遺跡周辺地形図

Ⅲ　ま　と　め

今年度で、宇佐バイパス建設予定地内遺跡のすべてについて調査を着手したことになる。

調査の進行は遺跡の内容にかなり左右された。しかも本調査を実施した遺跡ではほぼ全面に遺構を検出し、当該地域の濃密な遺跡の分布を再認識することができた。各遺跡には立地、時代や検出遺構にそれぞれの特徴があった。以下、主なものについて説明していきたい。

横山遺跡では丘陵部に集落が形成されていた。このような例は中津市森山遺跡、宇佐市台ノ原遺跡などに見られる。しかし本遺跡のように、比較的狭い独立した丘陵上に分布する弥生時代前～中期の小規模な集落はその機能を考える上で注意すべき立地をもつものといえよう。

尾畑遺跡では今年度で対象面積約20,000㎡の調査を完了した。遺跡の内容は、断続的であるが縄文時代後期から奈良時代におよぶ遺物・遺構があり多様であった。このなかで北地区の縄文時代後期後半～晩期前半の遺物包含層では約600㎡の範囲に、厚いところで4～5層の堆積を確認した。包含層については、Ⅰ層に多量の遺物がみられ、漸移するⅡ層以下と明確な差が認められた。土器には三万田式～岩田第四類、滋賀里Ⅱ式におよぶ時期の幅が認められるものの、現段階では晩期前半頃の資料が量的に多い。また、土偶や土製品も多く出土している。土偶は県内では15遺跡から出土しているが[注]、20例以上出土した遺跡は現在までに尾畑遺跡を除いて確認されていない。尾畑遺跡の26例は、九州でも熊本県熊本市上南部遺跡の112例、同泗水町三万田遺跡の55例に次ぐ数である。土偶の形態は多様であり、大きさも一定していない。土偶の分布については、包含層以外に縄文時代の生活の痕跡が見られない状況では、一応土器と同様の出土傾向を示すという点を指摘するにとどめておきたい。また土偶の時期は出土土器と同じような幅が考えられる。

奈良時代の遺構では昨年度までに調査した南地区の建物群と、今回調査した溝がある。

溝は河川とほぼ平行して伸びており、北Ⅱ区の南北でそれぞれ4本を検出した。南半部では3本の溝の北西端が途中で河川に向かい消えるが、そのうちの一本は確実に北半部の一本と連続する。これらの溝は相互に近接あるいは重複しており、溝の設定位置にその機能に関わる規制が働いていたものと想定できる。溝の堆積土は一定期間滞水していたことを示していた。出土した須恵器は溝の時期を限定するものであり、しかもその時期は南地区建物群とほぼ同時期の8世紀中～後半を示している。溝は流れの方向からみて、南地区建物群に近いところから取水し、段丘の縁辺に沿って北西部の平野部に給水した可能性がある。ただ、現状では溝に付帯すべき施設が確認されていないため、その内容は不明瞭である。

近年、隣接する路線内の調査において8世紀中頃から後半の建物跡や溝が散在することを確認してきている。このような遺構分布のあり方は、周辺の平野部における当時の水田経営の様相を知るうえで重要な意味をもつと思われる。

注　宮内克己「九州縄文時代土偶の研究」九州考古学第55号、1980年他

SUMMARY

This report is the result of the investigation required prior to the construction of the Usa Bypass. As a result of the investigation, we have located six sites in this area.

No. 2 Yokoyama site
No. 3 Obatake site (found during the third investigation)
No. 5 Minezoe site (found during the second investigation)
No. 6 Shoubugasako site (trial excavation)
No. 7 Yanagisawa site (trial excavation)
No. 8 Matsugasako site (trial excavation)

The Board of Education of Oita Prefecture has undertaken the investigation work of these sites since the spring of 1989. Two sites were clarified by our survey. viz., The Yokoyama site (No. 2) and The Obatake site (No. 3).

Yokoyama site (No. 2) : This site was located on a slightly elevated hill. From the top layers of hill to the middle layers, features and artifacts from the beginning of the Middle Yayoi period were uncovered. The features were pit dwellings, storage pits and other earthen pits. Members of the Board of Education of Usa City examined the area of western part of the researched area. The results of this research are as follows : 1) dwelling pits, storage pits from the end of the Eary Yayoi Period to the beginning of the Middle Yayoi Period, and 2) dwelling pits and ditch (moat) etc. From the late to end of the Middle Yayoi Period were found.

In excavations in vicinity of the Yokoyama site, viz., Dainoharu in Usa City and Moriyama in Nakatsu City similar conditions were found. However a General Settlement on the narrow flat level of a low hill like Yokoyama is not to be found. The function of Yokoyama was unique.

Obatake site (No. 3) : The investigation of this site has been going on since 1987. This time we examined a layer containing cultural remains from the Late to End Jomon Period and an 8th Century ditch and earthen pits. This layer extended along side the Iroha River which flows north-east. The layer was about 90 meters in length with the widest part measuring 20 meters in each area. E~G-Ⅳ, Ⅴ area located in the middle of the dig is slightly sunken and we found this area to have the thickest dispositin. The topmost portion of the layer was 20-60cm thick and had a dark brown color. A large quantity of pottery and stone tools from the end

of the Late to End Jomon Period were unearthed. Many clay figurines and disk-like clay objects were also found. The most important finds were the figurines and ditch.

Clay Figurines : These dolls,made during the Jomon Period are molded from clay and baked. In Kyushu these were made from the Late to End Jomon Period. Most of the figurines symbolically represent "woman" and are thought to have been used in religious rites. 26 such figurines were found. This site ranks third in the amount of those found in Obatake. Moreover, there is variety in shape and size of those found in Obatake. These facts point to the existence of a basic community having been situated near this layer.

Ditch : The ditch probably carried water to the rice field. It was dug parallel to the Iroha River. We confirmed its length to be 200meters. The ditch took in the water from the area of the buildings in the south carrying it to the northern part of the site where, most likely, there were rice fields. At this time it is not possible to be certain of the nature/function of this feafure, but it can be held that this ditch is related to the buildings and other small ditches of the same period. This ditch as well as the buildings found in the SOUTH AREA were constructed in the middle to late 8th century. Near this site are the remains of a government road and rice field grids. These features are of significant importance in the study of the management of rice fields and life style of the settlements of that period.

一般国道10号

宇佐バイパス建設に伴う埋蔵文化財
発掘調査概報　Ⅲ

横山・尾畑・峯添・正布迫
柳沢・松ケ平遺跡

1990. 3 .31

発行　大分県教育委員会
印刷　明治印刷株式会社